
バカと努力っ娘と四角形 えくすとら!

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと努力っ娘と四角形 えくすとら！

【Nコード】

N0463T

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

突然、お邪魔しますm(_____)m

【バカと努力っ娘と四角形】の作者、【暮灘雪夜】と申します(_____)

えへ、その…サプライズです(^^;？

実は、長期休載&復帰前から、普段より仲良くさせて頂いてる作家先生の皆様と、【コラボ規格】をやるうって話が水面下で動いてまして…（^―^；）？

ならいつそ、新作として発表してしまおうと作成したのが、この【えくすとら！】な訳なんです（o^_^'）b

そして、各先生方とのコラボだけでなく、話の性質上、本編の【バカ努力】では発表しにくい【外伝】…例えば、そう【西多摩先端研究学園都市】を舞台にしたエピソードとか（^^；）？

そんなのを織り混ぜられればと思っています。

性質上、メチャクチャ不定期アップになると思いますが、本編の【バカ努力】同様に、この【えくすとら！】も楽しんで頂ければ、幸いですm（―）m

6/2、バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録（パイロット版）】を追加

レフェル先生とのコラボ作品：【僕とみんなと七つ星 ドロップ】

E p i s o

皆様、おはようございますm(____)m

なんか勢いだけで徹夜して、気が付いたらコラボ作品が完成してた
暮灘です(^^;?)

さてさて、記念すべき【えくすとら！】第一作目は…

レフェル先生著の【俺と彼女と召喚獣】から先生のオリキャラ【新
条ありす】ちゃんと、同じく先生著【こーちゃんとわたしと召喚獣】
より同じく先生のオリキャラ【相沢綾菜】ちゃんを借り受ける事が
できました。

3

レフェル先生とのコラボ・シリーズ【僕とみんなと七つ星ドロップ】
のコンセプトは、【もし、バカ努力世界に、レフェル先生の二人の
キャラがいたら？】と、【もし、レフェル先生キャラの二人とその
パートナーが、全員、幼なじみだったら？】なんです♪

まとめてしまえば、

吉井明久、霧島翔子、姫路瑞希、坂本雄二の【バカ努力の幼なじみ
四角形】に加え、土屋康太、新条ありす、相沢綾菜が幼馴染み…つ
まり、この七人が【七つ星】って訳なんです(^^;?)

ぶっちゃけ、【バカ努力】の平行世界(笑)です。

そして今回は、短いながらも実験的に【一人称モノローグ】という形で描いてみました。

幼馴染みが【七つ星】になった事で、それぞれの人生も大きく変わった者もいれば、あんまり代わり映えしない者もいたりしますが、レフェル先生の作品とも、【バカ努力】とも違うテイストを味わって頂ければ、幸いですm（――）m

レフェル先生に怒られないか激しく不安（汗）ですが、どうかお楽しみください（――）

キラキラ七つ星

遠いお空で光ってた

キラキラ七つ星

みんなで仲良く光ってた

キラキラ七つ星

だけどーつが流れたよ

キラキラ六つ星

そうしたらなんだかちぐはぐで

キラキラ六つ星

みんなバラバラに光ってた

キラキラ二つ星

最後はいつのまにか

キラキラ二つ星

二つずつならんで消えた

キラキラ七つ星

でも本当はもう一度

キラキラ七つ星

みんなで夜空に光りたい

夢…

夢を見ていた…

それはとても懐かしくて…

それは、たしかに【わたし】だった…

『やだっ！ 雄二と離ればなれなんてヤダッ！ 【西多摩】になんて行かない！ ずっとずっと、この街にいて、雄二のお嫁さんになるんだからあっ…！』

あつ、でも、この後って確か…

『パパもママも嫌いっ…！』

そうそう、無理矢理押し込まれて、車は走り出したんだけど…

（へへ〜ん♪ 【わたし】の雄二への想いを、甘く見てもらっちゃ困るんだよ〜だ！）

前触れなく、車内から突然消える、今よりもずっとちっちゃいわたしの体！

そして、現れたのは、

『あい・きやん・ふら〜い♪』

正確には、【跳躍^{ジャンプ}】なんだけど、英語、苦手だったの…今もだけど

(汗)

『What dose it!? Why falling from the sky!? (どうなってやがるっ!? 何故に空から降ってくる!?)』

ちっちゃいわたしが現れたのは、同じく今よりずっとずうっとちっちゃい雄二の頭上3m

ちなみに、この頃から、雄二は英語がペラペラだったんだよ？

そして、わたしは重力さんに引かれるままに、雄二の胸に飛び込んだのさ シ

”どしゅん”

それでも、しっかり私を抱き止めてくれた雄二…

(格好良かったなあ…)

だから、雄二の胸板に顔を埋めて、思わずすりすりしてしまったわたしに、罪はないと思うんだ♪

そして、わたしは…

『雄二、ただいま!』

雄二は、びっくりしたままだったけど、

『イテテ…よくわからないけど、』

それでも、わたしの大好きな笑顔で…

『おかえり。【ありす】』

わたしの意識は、ゆっくりと夢から、現実へと戻ってくる。

（雄二に会いたって想いが、【能力開花】の起動キーだったなんて…）

我ながら、凄いと思う。

まるで、大好きな幼なじみに、【もう一度、会いたって】って願っただけで、その子を因果導体にしちゃた赤毛の女の子みたいだ。

（あのゲーム、雄二と号泣したなあ…）

えっちなジャンルのゲームだったけど、中身はめちゃくちゃシリアスだった…だって、異星人の作った有機ロボットのせいで、人類が滅びかけてるんだよ？

（それにしても…）

「懐かしい夢を見たなあ…」

あれはもう、何年前だっけ？

そして、わたし…【ありす】は、同じベッドで同じ毛布にくるまって、安らかな寝息をたててる男の子の顔を覗き見る。

昔よりずっと精悍で、凛々しく男らしくなったけど…

（変わらないなあ…）

燃えるような真っ赤な髪と、今は閉じられた瞼の下にある力強く優しい瞳…

わたしの大好きな、大好きな…

「おはよ、【雄二】」

起こさないように、そっと唇を重ねた…

（さてと…）

わたしは、やっぱり雄二を起こさないように、そっとベッドから出る。

「うわ…かぴかぴ（汗）」

雄二とわたしの…の混合液が、乾いて全身アチコチにこびり付いてた。

（あはは…）

ついでに言っちゃうと、内側は前も後ろも、まだ【どろどろ】って感じ（汗）

「雄二、昨日、いっぱいいっぱい頑張ってくれたもんね」

と、年頃の女の子がこんな事を言うのも、どうかなって気はするけど…

（雄二、理性のタガが外れると、ケダモノだから）

某ゲーム風に言うと、

【野生化】＝気力上限170＋格闘武器の攻撃力20％up＋攻撃必ずクリティカル
って感じかな？

雄二はクールに思われる事が多いけど、実はかなりの情熱家で熱血屋だからね

（さて、シャワーを浴びてきますか）

たしかに雄二なら、こんな風なわたしを【色っぽくていい】とか言いそう…嘘つきました。実際言われます。だけど…

「それでも一応、女の子ですから」

例え、身長が136cmしか無くたって、引っ込んでるとこ引っ込んでて、出るところもついでに引っ込んで（泣）、雄二に「その【なだらかな肢体^{からだ}】がまた萌える」と言われても、

（女の子なんだい！）

大体、【なだらか】って何よっ！？

それ、絶対に女の子の体型に使う言葉じゃないよねっ！？

（うっっ…わたしの【第二次性徴期】って、どこにいつちゃったんだろ…？）

いや、そりゃあ、こういう体型の方が雄二は喜んでくれるけど…

「女の子は、色々複雑なんですっ！」

すっぱんぼんのまま、おかしい気合いを入れて、下着片手にシャワールームへ、G o A H e a d！！

（と、その前に…）

わたしは、お腹を軽くさすってみる。

（やっぱり…）

「受精しちゃてるなあ…」

昨日は危険日だったのに、あれだけすれば普通、そうなるか。

でも、わたしは慌てない。

(ごめんね…)

【まだ】、生んであげられないんだ…

少しだけ【能力^{ちから}】を込め、わたしは対象を【跳躍】させる。

「ばいばい…」

少しだけ切なくなるけど、仕方ない事だと割り切る事にする。

「よしっ！」

少ししんみりした空気を洗い流すようにシャワーを浴びるわたし。

小さな肢体中に【マーキング】された【雄二の匂い】を落とすのが、ちよつとだけ惜しいと思うのは、ナイショだよ？

でも、雄二が目を覚ます前に、わたしはいつもの【ありす】に戻って、おはよーのキスをして、朝ごはんの準備をしなければならないのだっ

あつ、そういえば、わたしの自己紹介、まだだったよね？

わたしは、【新条ありす】♪

雄二と同じ、今日から【文月学園】高等部の高校一年生♪

身長は136cmで、ちょっぴりちっこいけど、自慢はいつつもツイン・テールにしてる水色の長い髪と…

何を隠そう、Lv4の【テレポーター（空間跳躍者）】だったりして

「そして、現在…ううん。何年も前から、雄二の可愛いお嫁さんになるべく、坂本家にて絶賛花嫁修行中なのですよ♪」

それは、まだ【七つの星】が再び揃う前の、まだ【二つ星】で輝いていた頃の、ほんの小さな物語…

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(____)m

取り敢えず、勝手にわからず四苦八苦してる暮灘です(^^;?;

今回は、本気でスタンスがわからないので、短くなってしまいが…

ぶっちゃけ、コラボ作品をちゃんと書いたのは始めてなので、果たして、皆様の目にはどのような映ったのでしょうか？(汗)

裏コンセプトは、【バカ努力ではクールなリーダーの雄二に、全身の穴と言う穴から砂糖が吹き出すような甘さを与えてみよう】って物だったりします(笑)

ご意見ご感想は、作者のドーピング♪
いつでもお待ちしております(____)

レフェル先生とのコラボ作品：「僕とみんなと七つ星 ドロップ」

E p i s o

皆様、おはようございます

なんか、気が付いたら徹夜してしまいました暮瀨です（^^；？

本日（5/8）、午後から実家で農作業手伝いがあるので、仮眠取らないと死ぬかも（汗）

さてさて、レフェル先生とのコラボ規格「僕とみんなと七つ星ドロップ」ですが、サブタイトルも一新し、ついにE p i s o d e 2の投稿ッス（o^_^）b

ついに、暮瀨が描くおにゃのこの中で、色んな意味で最大サイズを誇る【相沢綾菜】ちゃんの登場です

そもそも、この【七つ星】は、

【バカ努力世界】に、レフェル先生キャラの【新条ありす】ちゃんと、【相沢綾菜】ちゃんがいたら？

というIF設定で始まったコラボ規格♪

それこそ、ありすちゃんだけ出して綾菜ちゃんを出さないのは、半端にも程があるという物！

そして、今度はEpisode1と真逆のベクトル…ネタとギャグの嵐です!!!() b

愛らしいレフェルさんキャラが、暮灘にいじられると、どうなるのか…?

興味のある読者様は、是非一度お読み下さい

それは、桜舞う春の一時…

文月学園のある街の一角。

世間一般で言う、公園と呼ばれる場所だ。

海沿いにあるかなり大きな公園で、既に円満そうな第二の人生を歩んでる老夫婦が散歩してたり…

「優乃くん…」

「なのは…」

「そろそろ、三人目…作るつか？」

「うん、今度こそ男の子がいいな」

「また女の子でもいいよ。男の子が出来るまで頑張ればいいだけだし」

「わたしも…優乃くんとなら、頑張れるよ！」

と、人目を憚らずイチャイチャしながら日本の人口増加、ひいては国力増強に貢献しそうなカップルがいたり、

「汚物は消毒だぁーっ！ ヒャッハアーーーーッ！」

と、火炎放射器を振り回すハイテンションなモヒカン・マツチヨは…居なかった。

ただ、首輪で繋がれたピンクのふわふわの毛並の牝仔犬が、片足を

上げて嬉しそうに放尿してる姿が、視界の端に映ったような気がしたが、【彼】はそれを見なかった事にした。

ついでに、【彼女】をさりげなく誘導しながら絶対に、それを視界に入れさせないようにするのも忘れない。

誠に賢明である。

それ以前に、【文月学園】の周りに海なんかあったっけ？と考えたその貴方。

【ご都合主義】をナメてもらっては困る。

海があると言えば海があり、山があると言えば山がある…それが、ご都合主義という物だ。

こういうのをなんと言うかというと【言ったもん勝ち】だ。

それはさておき、その公園を歩く二人…【彼】と【彼女】だ。

彼、少年は、身長こそ165cm前後と現代日本人として小柄な方だが、均整のとれた体つきと隙の無い身のこなしから、見る人がみれば【タダ者ではない】事が、直ぐにわかる。

ラフな感じの黒髪と、切れ長の静かだが鋭い眼光を持つ双眸が印象的だ。

そして、彼女…少女だ。

見ただけで、かなりの長身だと分かる。

ざっと175cmぐらいは、楽に有るだろう。

身長の次…いや、ある意味、身長以上に目立つのは、その歩く度にゆっさゆっさと揺れる巨大な二つの膨らみだ。そのサイズは、実にH48…いや、ドイツで計画上は存在した戦艦ではなく、48インチ（約122cm）のHカップだ。

髪は牛乳…もとい。濃くしたミルクティー色で、その「ダイナミック・バスト・ボンバー！」と叫びながら新たなプロレス技を編み出したくなるようなナイスなボディとは裏腹に、顔は可愛い系の極めつけの童顔…

まあ、取り敢えずそんな女の子である。

「時に【綾菜】…」

ふと少年はピタツと止まり、身長差から見上げるような感じで、おそらく少女の名をといかける。

いや、綾菜が名字であっても一向に構わないのだが。

「ふえ？　なあに、【こーちゃん】？」

コツチはコツチで本名だったら中華系間違い無しだろう。

【虎張】とでもなるのか？

いやいや、それは中華語だったら【フーチャン】だっちゅーねん。

「俺のトレーニングについて来るのも、忍術を習いたいという戯言（たわごと）も、しょーがないと諦めた」

「タワゴトはひどいよぉー！　綾菜は、いつだって本気のほんき！

いつも全力全壊だもん！」

必死にアピールする【デッパイ】な少女。

突然の暮灘的用語解説

デッパイとは、【デカいオッパイ】の略であり、その反対語は【チッパイ】というらしい。

「字が違う。いや、お前の場合、あながち間違ってもいない…か？」

何故、地の字が分かるのはツツコンではいけない。

きつと言霊でも見えてるのだろう。

「とにかく、それは特にさし許す。確かにお前は放っておくと、危なくて危なくて危なっかしいからな…色々な意味で」

「三回も言われたあゝっ！（泣）」

つい涙目になる綾菜だが、ここは綾菜の将来を考え、厳しく躰るべきという親心（笑）から、あえて頭を撫でくりまわして、宥めてやりたいという衝動を、少年はグツと抑え、

「取り敢えず聞け。とにかく、付いてくるのは許す。だが…」

少年は何かを思い出したように、

「いつぞやのように、野良猫、野良犬、野良フェレット、野良椰子蟹^{ヤシガ}を拾ってきて、お持ち帰りしようとするな」

…何か、聞きなれない物が混じってる気がする。

「え〜！ だつてだつてえ〜っ！！ 可愛いんだよお！ スリスリしてくるんだよお！」

少年、眉間を押さえ頭痛と戦いながら、

「ヤシガニがスリスリするというのは、どういう状況だ？ それ以前に、ここは種も仕掛けもない関東だ。何故、椰子の木がないのに、ヤシガニがいた？」

すると、綾菜は困ったように、

「綾菜に聞かれても知らないよ〜っ！ きつとヤシガニさん、気が変わって櫟の木とかに住むようになったんじゃないかな？」

少年は、頭痛が更にひどくなるのを感じつつ、

「どういつ生物学を無視した突然変異だ、それは？ そんなのがいたら、メンデルやダーウィンが、あの世で号泣する。第一、それではヤシガニじゃなくてカシカニだ」

綾菜は、にばあ〜つと笑い、

「じゃあ、カシカニさんなんだよ、きつと」

ついに少年は諦めたような溜め息をつき、

「…良かったな。新種の世紀の大発見だ」

「うん」

少年の記憶は過去を遡り、

「そうだったな…お前は、小学校の遠足で行った潮干狩りで、カブトガニに懷かれて持ち帰る奴だったな…」

ちなみに、遠足先は有明海でも九州の海でもない。

興味のある人は、カブトガニを検索してみよう♪

「とにかく、カブトガニやヤシガニやスベスベマンジュウガニは却下だ。特にスベスベマンジュウガニは猛毒を持つてるからな」

と、少年は一旦、言葉を切り、

「フェレットとかイタチとかの、げっ歯類は特にアウトだ」

「ほえ？　なんで？　可愛いのに…」

綾菜は不思議そうな顔をするが、少年は至って真面目に、

「連中は突然喋りだし、赤いビー玉を渡しながら化物と戦う事をなし崩しに強要し、挙句、『僕と契約してよ！』と違法営業を迫り、お前を魔法少女だか魔砲少女だかに仕立てあげそうだ」

「色々混じってる気がするの、綾菜の気のせいかなかな？」

ワルプルギスの夜と、管理局の白い魔王（25歳+デンデロビウム

モドキ付き）は、どっちが強いんだろうか？

「しかも、軍隊モドキのブラックな職場にバイト扱いで放り込まれ、成り行きで正社員にさせられ、19歳にもなるのに魔法【少女】を名乗らせられる屈辱に合い、25歳になっても浮いた話一つ無い人生に絶望し、エントロピー維持のエネルギーを吸い取られた後の絞りカスが、世に災いをもたらす存在になりそうだ」

「やっぱり色々混じってる気はするけど…」

綾菜は、ニコツと満面の笑みで、

「綾菜のこと、心配してくれるんだあ…」

「…フ、フン」

それは、照れ屋な少年特有の肯定の意思…

「こーちゃん、だあゝい好きっ！！」

”むぎゅ〜！！”

「ば、ばか！ 止めろ！ 抱き着くな！ 顔を胸に挟むな！ さ、酸素…」

それは、とある何気なく時間の流れる春の晴れた日…

小柄な忍者少年【土屋康太】と、大柄な忍者少女【相沢綾菜】…そんな凸凹な二人にとっては、わりと平凡な一日だった♪

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

レフェルさんの怒りを買わないか心配なぐらい、いじり倒してしまい、先の展開が見えない暮灘です(^^;?)

「ん」と、ここでもいいのかな？」

えっ？

インディ先生！？

なんだってこんな所につ！？

「カラルに『暇なら逝ってこい』って言われたんだよ。別にわたし、暇じゃないんだけどなあ」

あはは(汗)

取り敢えず、自己紹介とかしといたら？

「そだね。え」と、皆様、はじめまして…かな？ 【インディ・T^{トーマ}・ミコト】だよ、【バカ努力】本編では、もうすぐF組に合流予定だけど、それまでは時間、あるからよろしくなんだよ」

し、しまった！

この娘、メガっさ可愛いんだった(汗)

「ありがとう ん、でも【試召戦争】で忙しくなったら来れないかもしれないけど、その時は、ちゃんと代役を用意してるから」
アンダースタディ

あはは、そりゃ準備の良いことで（＾＾；？

「それはそうだよ。それでも、先生なんだゾ えっへん♪」

アカン…

くらくらしてきた…

「それ、寝不足じゃないかな？（汗） じゃあ、わたしが代わりにやるから、休んでいいよ？」

へっい…

「皆様、エピソード2はいかがだったでしょう？ ギャグとネタばかりだけど、元ネタ探しをしても楽しいと思うよ♪ せつや、これでいい？」

ばっちリッス（o^_^）b

不定期更新なので次回はいつか不明ですが、またお会いできる事を願いつつ…

「またね！だよ♪」

ご意見感想は、作者の生命線（汗）

いつでもお待ちしております（――）

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】 パイロット版（オルソラの場合）

皆様、こんばんわー

本日は、【バカ努力】は少しお休みして、昨日（6 / 1）の活動報告に書いた、

バカ努力外伝：

【とある雄二の禁書目録】

パイロット版（オルソラの場合）

を書いてみたいと思いました。

パイロット版というのは、【あくまでこんな話】というイメージを掴む為に書いた【試供品】です。

だから、【本編】とやや違う書き方になっております（^^；？

時系列的には、【試召戦争】後で、【清涼祭】前になってます（o
^ - '）b

なので、一部【本編のネタバレ】を含んでいます。

また、【パイロット版】という事なので、あくまで、このまま【本編】になるわけではなく、大幅に改編される可能性があります。

【活動報告】を読まれた読者様は、既にご存知でしょうが、【とある雄二の禁書目録】シリーズは、

A 案

【とある】シリーズ原作の【法の書事件】をそのまま【バカ努力】と組み合わせるコンバートするもので、原作と同じく、追われるのは【オルソラ・アキナス】で、追うのはローマ十字正教【アニエーゼ隊】です。

B 案

追っ手は、【アニエーゼ隊】なのは変わらないんですが、【裏切り者】として【神の敵】のレッテルを貼られ追われているのは、錬金術師【アウレオルス】と吸血鬼殺しの【姫神】です。

今回は、A 案のプロローグを文章化してみました（^^;？

B 案はまだ文章化してないので、比較は後回しにして（汗）、ご意見ご感想をお聞かせ願えたら幸いです（――）

とりあえず、前半は【とある雄二の禁書目録】のタイトルに偽り無し【砂糖を吐く】展開（笑）

後半は、雄二の【魔法や魔術にこり固まった者では考えつかない】冴えた推理を魅せます。

良かれ悪かれ、原作のカミジョーさんの【明確な差】を意識して書いてみました。

楽しんで読んで戴けたら、嬉しく思います(o^・^o)b

act - 1

【かくて平和な日常は訪れたり】

文月学園旧校舎屋上

昼時…

雄二side -

「天におわします我が父よ。世は事において他になし」か…平和だねえ」

試召戦争も終わり、今はほんの一息。

魔術だなんだと、ややこしい側面もあったが、なんとか無事に終わり、明久と翔子、それに瑞希の問題は、【とりあえずの決着】もつき、俺は安心と平穏を取り戻していた。

（しかし、【眩炎】に【もう一つの属性】が備わってたとわなあ）

まあ、おかげで【ネセサリウス（必要悪の教会）】公認の対十字教専門の【魔術師殺し（メイジ・キラ）】なんて怪しげな代物になっちまったんだが…

（かといって、何が変わる訳じゃないけどな…）

まあ、単調な日常のちよつとしたスパイスって感じかねえ？

「平和が一番だよ、それより、ユージユージ、お弁当お弁当」

と、俺の横で期待満々の目で俺と弁当を交互に見る銀髪&エメラルド・アイのちみつ娘…

【インディ・T・ミコト^{ターマ}】だ。

自称【俺の第一夫人にして第一の飼い犬（笑）】らしい。

本人曰く【既に結婚してるような物で飼われてるような物】だから
とのこと。

否定する気は全くないけどな、やることはやってるし、実際、家に
居つかれたしな（苦笑）

それに、まあ…

（めっちゃ好みだし）

いや、特に可愛い顔&性格とか、ちっこい^{からだ}肢体とか…

（それより、第一ってどういう意味だ？）

第二とか第三とかって、増やす気はねーぞ？

そんな事はどうでもいいか。

「まあ、落ち着けて。すぐに開く」

と、俺は二人分を詰め込んだ弁当を開いた。

「うにゃん」

と、スピキオばりの鳴き声で、喜びを表すインディ…

そのエメラルド色の瞳を輝かせる姿を見るのが、俺はとても好きだった。

（おかげで、料理の腕前は、鰻登りに上がったが）

それはそれで悪くねえけどさ。

「ユージ、あ〜ん」

と、インディは目を閉じて口を開く。

なんか、餌をねだる雛鳥を連想させるな…

「ほれ」

とりあえず、一口サイズのコチジャンで下味を付けた唐揚げを放り込む。

「どうだ？ 美味しいか？」

「おいひっ」

満面の笑顔のインディ。まあ、だけど嫉はせんな。

「こゝら。口に物を入れたまま喋るのは行儀が悪いぞ？　そういう時は、頷ぐくらいで良いから」

コクコクと頷くインディ。

素直な娘は、好きだぞ？

（ところで…いつもの事とはいえ、）

さつきから刺すような視線が、メガツさ気になるんだが…

「なあ、ステイル…そんなに気になるんなら、いい加減一緒に食わねえか？」

だが、5 m以上離れた地点から返ってきた台詞は、

「黙れ赤毛！　僕はお前と馴れ合う気はないっ！…」

へーへー、さよでつか。

つか、お前だつて赤毛だろうがよ…

”にゃ”

『この場合、放っておいてやるのが優しさだ。敗者として誇りという

物があるのだからな』

食べていたネコ缶（いつの間にか、モ。プチとかが購買に置いてあったな…）から顔をあげ、面倒そうにスピキオは言う。

「プライドねえ〜」

満足な告白もできなかった奴に何も言う権利は、無いと思うぜ？

「好きなら好きと、最初から言ってりゃいいものを」

” じゃあ ”

『かくも不器用な男なのだろうよ。ユージのように、誰もが欲しい物を欲しいと言えるなら、この世の悩みの半分は、無くなるさ』

そんなもんかねえ？

「俺は、インディが好きと言えないようなのは、想いを伝えられないのは御免だけだな…」

「ユージ…」

” きゅっ ”

急にインディが俺に小さな肢体を押しつけるように抱きついてきた。

「ん？ どうした？」

「わたし、ユージに【飼って】もらえて、幸せなんだあゝって」

「そっか…」

俺は、そつと銀髪を撫でる。

インディは、どういう訳か【飼う／飼われる】って言う表現を好む。

そういう時は、決まって【甘えん坊オーラ（笑）】全開だ。

理由は、何となくわかる…

（インディには、まともな子供時代なんて無かったからな…）

【禁書目録】なんて宿命…人の身では有り余る力を持つ、【絶対の強者】であるインディにとって、【弱者】は…

（【守るべき存在】でしかないからな…）

甘えられる訳はない。

だから俺は、

（インディを何の変哲もない女の子として扱った…）

【良質な道德を持つシスター】でもなく、【最強級の魔術師】でもなく、ましてや【禁書目録】でもない、【ただの女の子】として…

俺は、ひょいっとインディを抱き上げ、

「ふにやつ!?!」

ぼすんと胡座をかいた膝の上に乗せる。

「…ユージって、わたしを甘やかし過ぎだと思っただよ…」

「そうか？」

「だから、たまに怖くなるんだよ…どんどん、歯止めがきかなくなるの…もつともつとユージに甘えなくなる、溺れなくなるんだよ…それが、ユージを巻き込んで、縛ってしまいそうで…」

自分の小さな体を自分で抱き締めるインディ…

「怖い…」

だから、俺はその小さな体全てを、後ろから抱き締める…

「気にするな。インディの気が済むまで甘えてかまわねえさ。お前一人を抱えられねえほど、俺は小さくねえつもりだぜ?」

「…うん」

嬉しそうに小さく頷くインディ。

「でも、ユージの愛は、わたし一人だけだと、ちょっと辛いかも」

「はあ?」

インディは俺の腕の中で真っ赤になって、

「だって、ユージ…スッゴくえっちで激しいから…」

HA - HA - HA !

全く否定できねー（汗）

「あつ！ もちろん、イヤじゃないんだよっ！ 今、縛ってもらってる【縄下着】だって、ユージにずっとギュッてされてるみたいで嬉しくて、気持ちいいし…」

才蔵の野郎を、笑えませんか…はい。

「ねえ、ユージ…」

「ん？ ずっと、こんな日が続けばいいね」

「そうだな…」

”にゃ”

『So Sweet…』

インディのチョーカー（首輪）に付けられた、聖銀の円十字と【I n d y】と刻まれたドッグタグが、春の日差しにキラッと煌めいた。

act - 2

【かくて平和な時は過ぎ去りて】

雄二side -

それから数日後の放課後、クラスじゃそろそろ【清涼祭】の話題が出始めた頃、俺はインディ共々、ステイルに屋上へと呼び出された。

「【オルソラ・アキナス】…？」

ステイルは、俺の確認の言葉に頷き、

「【法の書】の解説に成功した【ローマ十字正教】のシスターって話さ。その彼女が、【天草式十字棲教】に誘拐されたらしいんだ」

その後を継ぐようにインディは、

「時同じくして、日本の博物館に移送中だった【法の書】が、何者かに奪われたんだけど…ステイル！ どうして、ユージを巻き込むんだよ！」

なんか、猫が威嚇するような仕草のインディだったが…

（妙だな…）

俺は、何かが引つかかっていた。

「僕だって、なんだってこんな奴…」

ステイルがぼやいているが、そんなのは無視だ。

「【法の書】ってのは、どんな代物なんだ？」

「【法の書】って言うのはね、【ローマ十字正教】が、バチカンに所属している誰にも解読できない暗号で書かれた魔導書なんだよ…」

誰にも解読できない？

（それじゃあ、誰にも書けないって意味に等しいんだが…）

そもそも書物に残すってのは、【自分を含む誰かに読ませる為】の行為だ…

（矛盾だぜ…）

「ついでに言えば、暗号を解いて、真の力を解放させれば【十字教の支配する世界を終わらせられる】とさえ言われてるのさ」

（更なる矛盾だな…）

天草十字教とて十字教の一派…

（十字教の支配する世界が終われば、困るのは天草とて同じ筈…）

そんな連中が、解読者と法の書を手に入れてどうする…？

（メリットが無いのに、犯罪を犯す馬鹿はいるのか？）

しかも、相手は十字教最大宗派の【ローマ十字正教】…

「なあ…天草が、ケンカ売る相手にしたら、少々デカ過ぎやしねえか？」

「そうとも言い切れないのさ。なんせ、天草十字教は、【聖人】の元の配下…いや、仲間だしね。恐らく、今でも…」

ああ、【カオリ】の出所ね…

「そして、カオリとも一昨日の夜から連絡が取れないんだよ…」

インディは凹むが、俺は別の事が気になっていた…

（そついや、瑞希も昨日今日と学校に来てねえな…）

アイツ、妙にカオリを気に入ってるから…

（まさかな…）

いや、その可能性を考えるのは後だ。

（とりあえず、直ぐに解決できる矛盾点を解消するとすつか…）

「インディ、【法の書】の解読が出来ねえって意味、詳しく教えてくれ」

インディは、少し顔を曇らせ、

「ユージ…関わるの？」

俺は、シャツの胸元をはだけさせ、首からかかるペンダント・トッブ…インディとお揃いの円十字を親指で指す。

前に【ローラ】さんって人（インディやスタイルの上司らしいが…）から、『インディと結ばれたお祝いに』と貰ったものだ。

「インディの問題は、俺の問題でもあるだろ？」

「ユージ…わかったよ」

インディは嬉しそうに、少し涙目で頷くと、

「【法の書】はね、実は100通り以上の読み方があって、それが全部ダミーなんだよ。誰でも読めるけど、誰もが誤った解答に誘導される…それが、【法の書】の怖さなんだ」

なるほどね…

（だとしたら、そのシスターも、もしかしたら…）

だが、【真実】へ到達した可能性も否定はできない、か…

（二つの可能性を考えた方がいいな…）

「もう一つ、ローマ十字教は、なんだって【法の書】なんて危険物を、日本のそれも【日本の博物館】なんぞに持ち込もうとしたんだ？」

だが、ステイルは首を横に振り、

「さあね。僕だってバカな話だと思うけど…」

（やはり、そこが一番の疑問…）

「確認したいんだが…ローマ十字教は、【魔導書の危険性】が分からないほど、あるいは魔導書と普通の本の区別が分からない程、魔術の素人集団なのか？」

「まさか！ そんなわけないよ」

（なるほど…そういう事が…）

誰もが、オルソラを【法の書の解読者】としてしか見ず、【法の書】とセットでしか考えないから…

（欺瞞されるっ！）

「インディ、ステイル…恐らく、日本に移送されてる途中に強奪された【法の書】は、真っ赤な偽物だ。場合によっては、【強奪】自体が、狂言だかマッチポンプの可能性が高いぜ？」

「なっ！？ 何を言ってるんだ君はっ！？」

「【魔導書は、科学世界じゃ核兵器に匹敵する】…そう言ったのは、ステイルお前自身だろ？」

「あっ、ああ…」

「あのな…どこの国に【核兵器の展示】をやるのに、いつでも起爆できる【本物の核兵器】を、犯罪者に強奪されるリスクがあるのに、海外へ持ち出すバカがいるんだよ？」

「あっ！」

インディは頭はいいのに、妙なところで抜けてるよなあ。

「今までの情報で唯一確定してるのは、『解読者オルソラ』が行方不明になったって事だけだ。んで質問なんだが、『法の書』を解読されて、一番困るのは、誰だと思う？」

「…えっ？」

この言い方じゃ通じないか？

「言い方変えれば、『十字教が支配する世界』が終わって、一番困るのは、誰だ？」

答えが分かったのか、インディとステイルは顔を見合わせ、

「『ローマ十字正教！』」

俺は、大きく頷き、

「【オルソラが誘拐された】ってのは、おそらくローマの言い分だろ？ 案外、オチは【異端諮問】かなんかに掛けられそうになって、オルソラ自身が逃げ出して、天草に駆け込んだ…なんて事じゃないのか？」

「い、いや、しかしっ！ ローマが我々にそのような…第一、メリットが…」

明らかに狼狽えるステイルに、

「メリットならイヤって程あるさ。【格下の十字教】を手駒に使って、【危険分子】と【異端の十字教】、上手くいけば、ブリタニア側の【聖人】も始末できる…」

俺は、腕を組んで、

「ステイル、インディ…まさか、世界の管理者を自認す【ローマ十字正教】が、自分達以外の教えを、【正統】だの【同格】だのって認めると思うってねえだろうな？」

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】 パイロット版（オルソラの場合）

皆様、ご愛読ありがとうございましたm(_____)m

パイロット版とはいえ、勢いだけで【とある雄二の禁書目録】を書いてしまった暮灘です（^^；？

「なんだか、シスターちゃんもラブラブになってますねえ」

こ、小萌ちゃんっ！？

ようこそ起こしでっ！

「小萌”先生”ですからね？（ニコッ）」

Yes！ アイアイ・ママ！

「もう…子供扱いは、プンプンなんですよ？」

了解（^^^^

「それにしても、【縄下着】とかって、坂本ちゃんには教育的指導が必要なんでしょうか？」

いや、許してやってよ（^^；；？

雄二の趣味だし、インディも悦んでるみたいだしさ。

「むう〜」

まあまあ、小萌ちゃんにもそのうちチャンスがあるって（o^_^）
b

「だから、先生ですう！ それにしても、坂本ちゃんは、随分と【魔術サイド】の深みにハマりこんでるみたいなのですね」

だね。

明久は、自覚無いままどっぶりだけど、雄二もかなりね（^^；？

どうやら、【アーク・ビショップ】とも面識あるみたいだし（汗）

多分、【今回の事件】に雄二を引き込んだのって、間違いなく【ローラ姐さん（笑）】だろうし。

「ビショップちゃんは、坂本ちゃんを【ネセサリウス】を引っ張りこみたいんでしょうか？」

えげつないぐらい明確に（^|^-）？

第一、【禁書目録の安全装置】として、雄二ほどふさわしい存在はいませんか。

というか、雄二が18歳になったら、さっさと結婚させて改宗させようとか画策してそう（笑）

皆様、風変わりなシリーズでしたが、お楽しみ戴けたでしょうか？
（^^；？

ご意見ご感想を戴けたら、本当に助かります（――）

なんせ、まだ方向性が大雑把にしか決まってるないシリーズですから
（^―^ ;）？

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】

シーン・サンプル集（オルソラの場合）

皆様、本日二度目のこんばんわーの暮灘です（^^；）？

今回は、パイロット版はパイロット版なんですが、バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】パイロット版（オルソラの場合）：つまり、A案の【クライマックス・シーン】の文章がなんとなくイメージできたので、ちよつと気まぐれでアップしてみました（^^；）？

【バカ努力】とか本編では出来ない【お遊び企画】ですが、こういう【制作日誌】っぽいのも、【えくすとらー！】っぽくていいかなあゝと（^^；）？

読者の皆様にお許し頂けるなら、こんな【えくすとらー！】独自の企画を気まぐれでやりたいのですが、どうでしょう？（^^；）？

今回は、【とある】シリーズの原作を知らないという意味不明だし、文字どおり【最初からクライマックス】なシーンを抽出しただけなので、本当にサンプルですが、ご意見ご感想とか頂ければ幸いです（

）

これで、【とある雄二の禁書目録】のイメージとかを楽しんでいた
だけたら嬉しいですよゝ

追伸

今回は、ただの【サンプル】ですので、【あとがき】はありません
(^^.??

V S イベント

雄二VSアニエーゼ

【法の書（オルソラの場合）】

場所：建築中のオルソラ教会

アニエーゼは、ニヤリツと笑い、

「どう考えたって、あれだけの人数を相手に自由に敷地の中を動けるとは思えないんですがねえ…ああ、仲間を【オトリ】にでもしちまったんですかい？ あれだけ格好つけてたのに？ オルソラは言っていましたよ…」

だが、雄二は深々と溜め息を突き、心底呆れた顔で、

「ぶわあゝか！」

「なっ、なんだとっ！」

血圧を高めるアニエーゼに、雄二は馬鹿にするように、

「お前の手下なんざとっくの鎮圧されてんぜ？ お前って、ホン

トおめでてえのな？ 神様のご加護がある限り負けませんってか？
まあ、所詮は狂信と盲信しか知らねえバカジャリの集団って事か
…」

「貴様！ 今の言葉を取り消せっ！」

激昂するアニエーゼを雄二は鼻で笑い、

「嫌なこった。それとも、現実を受け入れられませんか？ あ
あつ、真実や事実をねじ曲げんのは、お前さん達の得意技だったな
？」

雄二がギロつと睨む！

”びくっ！”

雄二は、アニエーゼが身体をすくませるのを見逃さなかった。

「アニエーゼよ…お前が用意した【兵隊】は何人だ？ 300か？
500か？ ナメんじゃねえよ…」

雄二は鼻で笑い、

「お前の敗因は、【乱入者】を予測できなかった事さ」

「ら、乱入者！？」

「いるんだよ…荒事になれば、必ず首をツッコミたがるのが」

雄二は今度は哀れみすら含んだ表情で、

「聖人モドキの【ピンク・タイフーン】だとか、猟犬になった途端、
とんでもない狂犬になるピンクの仔犬とその飼い主とかな…」

雄二は苦笑すると、

「俺とインディ、ステイルと建宮達の天草だけで十分だったのに、
たかだか、1000人にも満たねえ尼見習い相手にするにやあ、過
剩戦力もいいところだぜ…おかげで」

雄二は、鼻でアニエーゼを笑い、

「暇になっちゃった俺は、テメエみたいな雑魚の相手に回されたの
さ」

雄二の口元がニヤリツと歪み、

「精々、下っ端なりに、暇つぶしになるぐらいは俺を楽しませてく
れよ?」

戦闘シーン

「神の子と十字架の法則に従い、異なる物と異なる物を接続せよ!」

アニエーゼが呪文を唱えると同時に、杖を床に叩きつける！

”カイン！”

それと同時に、

”ガッン！”

「ぐっ…！」

雄二の頭に、衝撃波…あるいは、【空気の塊のような物】が命中した。

しかし…

「くだらねえ…所定座標の空間を歪ませ、空気を圧縮して打ち出すか…」

”ゴキッ”

その攻撃は、雄二の首を傾かせたに過ぎない。

雄二は、首を鳴らして頭を元の位置に戻すと、

「その杖と連動してんだろ？」

アニエーゼは、勝ち誇ったように、

「一発食らっただけで分かんとは、大したオツムじゃないですかいっつ？」

尚もサディスティックな笑みのアニエーゼに、

「バカが…一撃で俺を仕留められなかったのは、失敗だったな？」

「はん！ 何を負け惜しみを…」

”ビュッ！”

「なっ！？」

それは、アニエーゼには信じられない動きだった。

比喻でなく、瞬きする間に雄二に懐に入り込まれ、

”ガッ！”

【ロータス・ワンド】を握り抑えられた拳げ句！

”ガッウーン！”

【眩炎】を付けた一発をボディに食らったのだから…

「ゲホッ！ ガハッ！」

弾き飛ばされ、床に叩き付けられた後、尼というより少女にあるまじき声をあげ、胃の中の物を嘔吐するアニエーゼを、雄二は死にかけた虫でも見るような目で見下ろし、

「気絶しねえように手加減はしたからな…まさか、これで終いとか
言わねえよな？」

” カラーン、カラカラ ”

雄二は握っていた、ロータス・ワンドをアニメーゼに投げ返すと、

「さつさと立ち上がってかかってこいよ。じゃねえと…」

明らかに挑発の笑みで、

「また【ゴミ溜めの路地裏】に逆戻りだぜ」

「き…貴様あーっ！！！！」

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】

パイロット版（アウレオルス&姫神

皆様、こんばんわー

本日も【バカ努力】はお休みして、

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】 パイロット版（アウレオルス&姫神の場合）

を書いた暮灘です（^^；；？

やっぱり、【とある雄二の禁書目録】パイロット版で、いわゆる【B案】も書かないと淒く落ち着かなくて。

A案、B案については、一つ前の【とある雄二の禁書目録】パイロット版（オルソラの場合）の【まえがき】や、最近（6/3現在）の【活動報告】を読んで欲しいのですが、簡単に言えば、

A案↓原作の【法の書事件】の【オマージュ】にした、オルソラ絡みの話。

B案↓【アウレオルス&姫神（追われる側）】VS【アニメーゼ隊（追う側）】という、法の書事件を【モチーフ】にした話。

実は、本日の段階で読者の皆様からの支持は、圧倒的にA案の方が上（5vs2）なのですが、B案をアップしないで結論出すのは早急だろうと（^^；；？

実は、今回のパイロット版は、前半はB案でありながら、後半は違うコンセプトで書いてます。

読み所と被りますが、前半は、B案の【肝の一つ】である【格好いいアウレオルス】を前面に押し出し、また姫神が【ヒロインの立ち位置】にいます。

後半は、実はB案専用というより、【シーン・サンプル】の意味合いが強く、コンセプトは【最も穏健な雄二とアニエーゼの邂逅】です。

いえ、一つ前の【シーン・サンプル集】で、【雄二VSアニエーゼ】のバトルシーンを試作したので、真逆のコンセプトで作りたくなっただんですよ（＾―＾；）？

というか、もしかするとアニエーゼにとっては、戦いが避けられないのなら、【もっとも辛いオープニング】かもしれませぬ。

つか、ゆうくんがナチュラルに【あまり幸せでない女の子】の心を、天然ピンポイントで揺さぶってます（笑）

一応、これでA案とB案が出揃いましたが、もう一度、聞いて良いでしょうか？

【とある雄二の禁書目録】、A案とB案を比較して、読者の皆様は、どちらを読んでみたいでしょうか？

お聞かせ願えたら、幸いですm(_____)m

勿論、そんなのは無関係に【純粹に読み物】として楽しんでいただくのも、大歓迎ですよ(o^_^')b

追伸

今回は、【あながき】が少し面白いです(笑)

タクラマカン砂漠某所

その二者は、睨み合っていた…

一方は、甲冑に身を包んだいかつい風体の男達。

もう一方は、場違いにも白いスーツを着て緑の髪のアールバックにした青年で、背中に巫女服に身を包んだ黒髪の少女を庇っていた…

「撫然…素直に引いてはくれまいか？ 私とて、無益な殺生をする趣味はない」

アールバックの青年は告げるが、甲冑の男達は、

「ふざけるなっ！ 貴様を追い詰めるまで、何年かかったと思ってる！？」

「三年かかり、ようやく追い詰めたのだぞっ！」

「もう逃がさん！ 裏切り者【アウレオルス・イザード】！！」

口々に叫ばれる殺意を隠さぬ言葉に青年…アウレオルスは、大きくかぶりをふって、

「咄然…君達は、大変な思い違いをしている。私は追い詰められてなどいない。逃げていたのは、無益な殺生を好まぬからだ。昔、あの誓い立てたのでな…」

脳裏を掠めたのは、【ティーカップに似た印象】の白いシスター服を纏った小さな女の子の幻影…

「お前達には、理解できまい。小さな身に重すぎる宿命を背負わされてもなお、自分ではなく、誰かの為に微笑める強さなど…」

微かに記憶の中の少女に、アウレオルスは微かに口元を緩ませた。

「だからどうしたっ!？」

「神の敵となつた貴様に、いかなる言葉も無意味無用!」

「異端には、死をもって制裁となすっ!」

甲冑達は、口々に叫びながら、半包围を敷く!

「敢然! 只の一人の無垢な少女も救えずして、なにが信仰! なんの救世あるものぞっ!」

まるで雷が落ちるような一喝が、荒涼たる砂漠に響く!

「アイサ」に何の罪があるっ！！ その重き宿業を背負いながらも生きようとするのが罪だというのなら、それが【ローマ十字正教】の正義だと言っのなら…良かるっ！」

”チャキン！”

彼は、一本の長い鍼を取り出し、

「我が名は、【Honos628】！！ ”Honos”とは本来、
”徳”を表す神の名…ならば、」

”ザスッ”

その鍼を無造作に首筋に打ち込み、

「我が”徳”にかけ、アイサをこの手で守り徹してみせんっ！」

一瞬、呼吸を整え…

「【ナイト・メア・フレーム】を我が前に出現させん！ 機体は、
ブリタニア王家直属親衛隊【ラウンド・ナイツ】の殲滅騎【モルド
レッド】！ パイロットは、ナイト・オブ・シックス【アーニャ・
アールストレイム】！ 数は、1騎で十二分！ 自慢のシユタルク・
ハドロン砲をもって、仇なす敵を悉く蹂躪せよっ！！」

乾いた砂に流れた血は吸い込まれ、肉の焼け焦げた臭いが、周囲に充満していた…

「…本当に。これで良かったの？ 私一人を助ける為に。こんなに殺して…」

おそらくは、“アイサ”という名の少女は、一見すると無表情…でも、瞳には涙混じりの哀しみを湛えていた…

「構わぬ。この戦いは【カルネアデスの舟板】…どちらかが倒れねば、どちらかは生き残れぬ」

そして、アウレオルスは、砂漠の風に流れるアイサの絹糸のような黒髪をそつと撫で、

「気にするな…とは、言わぬ。だが、君は【生き残るべき存在】だ。私の中の”徳”が、そう告げる…」

しかし、遂にアイサの美しい黒い瞳から大粒の涙が零れ落ち…

「でも。私が存在する限り。人が死に続ける…【あの人達】も、ローマ人も…」

だが、アウレオルスは熱砂混じりの砂漠の風からアイサを守るように、柔らかに抱き締め…

「案ずるな。君の【血の宿業】、いつか必ず我が英知でどうかしてみせる…」

アウレオルスの腕の中で、アイサは小刻みに身体を震わせると、

「ひつく…うつく…うわああーん!!」

まるで子供のように泣きじゃくるアイサを、アウレオルスは泣き疲れて眠るまで抱き締めていた…

(守ってみせる…)

「あの娘にもう一度会う事があるのなら、私も胸を張っていたいかな…」

一方、場所は変わって【坂本家】。

正確には、【雄二とインディの愛の巣】で、同時にスピキオの【塙^{ねぐら}】でもある場所だ。

あれ？

坂本雪乃さん（雄二ママ）とか父親は、どこに行ったと？

なんでも、急な【栄転】で、夫婦共々【ブリタニア】に行ったらしい。

ちなみに、5年やそこらは帰ってこないようだ。

何やら、作為的な物を感じるが、きっと気のせいだ。

なんか、身長の2・5倍の長さを誇る金髪の女狐（珍妙な日本語エンジンジンを標準搭載）が、裏で糸を引いてるような気もするが、多分、それも思い過ごしだろう。

【好奇心は猫をも殺す】なんて諺があるぐらいだから、下手に詮索しない方が、心安らかに過ごせるという物だ。

しかし、普段なら濃密過ぎて脳量子波を通じて拡散したら、刹那辺りがELSとの初コンタクトを試みた時よりも痙攣&昏倒しそうなピンク色の空気と、時折、ハードボイルドが入り混じるこの空間だが、本日は少々、毛色の違う”匂い”が混じっていた。

「なんでこの僕が、呑気に君の家の夕食にお呼ばれせねばならん！
そついきりたつのは、身長は雄二と同等（ちなみに体格は雄二のが

僅かに上）、長さは違うが同じく赤毛と微妙にキャラが被り、一番の違いは【ルーン魔術師】か【魔術師殺し】かと、つけてるアクセサリーの数という男…

そう、ステイルだった。

「夕食時に話を持ってくる、お前が悪い。それとも何か？ 俺の可愛いインディを空腹にさせたまま仕事の話をしろとでも？」

と、キッチンから二つの圧力鍋の様子を気にしながら、サラダ用の野菜を刻む雄二が反論してくる。

更に…

「そうだそうだ〜！ ステイル、人でなしだよ！」

と、雄二と同じくキッチンで、食器の準備をしていたインディが、合いの手を入れてきた。

「うぐっ…」

二人の合体精神口撃（笑）を食らって言葉を詰まらせるステイルであった。

しかし、そこは雄二。

チャンスと見たら、無意識でも攻撃の手を緩めない。

「なあ、ステイル…言いたくはねえが、お前の【敗因】って、権威

だの立場だのって、【お前とインディ以外の誰か】が決めた、つまらねえモンに縛られて告白できなかったのと…」

「ぐほっ！」

雄二の放った【見えない刃（笑）】が、無造作にステイルのハートに突き刺さる！

「インディの胃袋のことを、考えてやれなかったからでねえの？」

ちなみに、雄二は全く悪意がない。

「あつ、それは言えるかもっ！　だつて、最初にユージの家に入り浸った理由つて、ゴハン目当てだもん♪」

だけど、そんなインディの銀髪を雄二は撫でくり回し、インディは気持ち良さげに目を細める。

「インディ堕とすには、まず胃袋から陥落させよつてな　なっ？」

雄二の言葉にインディは満面の笑みで、

「ねっ」

その仕草があまりにも愛しかったのか、雄二はひょいっとインディを片手で軽々と抱き上げ、

”Chuっ”

キスは勿論、ブリタニア式のマウス・ＴＯ・マウス♪

最近、出産したばかりの友人、【ミコト】の影響からか、しきりに赤ちゃんを欲しがるインディの為に、何があるかと絶対に避妊はしないと心に誓う二人らしいキスである。

さてさて、そんな二人の姿を見せつけられたスタイルが、26ターンの目の運命を呪う言葉を呟いた時の事だ。

”キンコーン”

と、突然にチャイム。

「ん、だれだ？」

玄関備え付けの防犯カメラと連動したインターホンをとると、画面に映ったのは…

「シスター？」

そう、黒いシスター服を着込んだ、おでこがチャームポイントっぽい、気が強そうだけど若い…というか、幼いと表現したくなる顔つきシスターだった。

「…服装が本物なら、【ローマ十字正教】のシスターだね…」

と、同じくモニターを覗いていたインディは、少し警戒するように
呟いた。

「なんだって、ローマの尼さんが、ウチに…？ 布教活動なら間に
合ってるんだが…」

ばやく雄二だったが、

「ああ、それなら心配ない…」

事態に気付いたスタイルは、

「ここの住所を教えたのは、僕だからね」

雄二が、何か反論する前に、モニターの向こう側のシスター少女は、

『夜分遅くに失礼しやす。コチラ、坂本さんのお宅でございやしよ
うか？』

雄二は、色々と思う事はあったが、

「その通りだが…何故に、お前さんは【べらんめえ調（江戸言葉）】
なんだ？」

雄二side -

玄関をあけると、

「いらっしやい。訪れる理由は、まだ聞いてねえが、とりあえず歓迎するぜ？ えっと、君は…」

俺がそういうと、そのちみっこいシスターは、

「自己紹介が遅れやした。ローマ十字正教、【アニエーゼ・サンクティス】と申します」

（それにしても、ミニスカ・シスター服に厚底サンダルとは、驚きだな）

「よろしく、シスター・アニエーゼ。とりあえず上がれよ。【ブリタニア系】の関係者は、中で揃ってる」

「じゃあ、遠慮なく」

と、土足のまま上がるうとするが…

「日本では屋内は、土足厳禁だぜ？ わりいが【チョピン（西洋厚底サンダル）】は、玄関で脱いでいってくれ」

すると、シスターは思ったより素直に、

「こいつぁ失礼しやした。そっぴや、日本ではそっぴやしたね」

と、チョコピンを脱ごうとするが…

「わわっ！」

狭い場所での脱いだり履いたり慣れてないのか、バランスを崩してすっ転ぼつするシスターだったけど…

「よつと」

俺は、慌てず騒がず手を握り、同時にしっかり腰に手を回し、引き寄せ軽く抱き上げる。

まあ、手を握っただけだったら、一緒に倒れてラッキースケベ・イベント（笑）になるような気もしたが、生憎、それほど飢えちゃいねえ。

「大丈夫か？」

俺の腕の中にすっぽり収まるようなシスターに、俺は問いかける。

（インディより、僅かに背が高いか？）

作者注：

インディは原作より10cm低い138cmの為、アニメエーゼの方が2〜3cmぐらい背が高くなります。

「すすす、すいやせん！ ぐぐぐ、ご迷惑おかけしやして！」

（ああ、そっぴや男子禁制のガチシスターだったか…）

真っ赤な顔が、少し可愛いとおもったのは内緒だ（笑）

しかし、そんな俺の思考を読んだかのように…

「あれ？ ユージ、もうローマのシスターさんをゲットしちゃったんだ？」

インディ…なんで、声が微妙に嬉しそうなんだよ？（汗）

さて、シスターをリビングに案内して、俺が料理を盛り付け、インディが運ぶといういつものシチュエーションが始まる。

「ほれ。インディ、あ〜ん」

「あ〜ん♪」

俺は、本日のメインディッシュの圧力鍋で煮込んだ【沖縄風豚の角煮】、その煮崩れた肉の欠片を、インディの口に放り込む。

インディはつまみ食い癖があつから、勝手に食われるより、先制攻撃といった方が、何かと都合がいい。

「どうだ？ 合格か？」

それと、料理運んで貰つてるお駄賃みたいなもんか？

「いつも通り、おいひ〜よ〜」

（ん…？）

何故か、どこか俺達を切なさうに…

（いや、羨ましいのか…？）

とにかく、そんな視線で見るシスターに、

（あんま、深入りしねえ方が吉だろうな…）

だから、俺は気付かないふりをして言う。

「シスター、ワインはフォロナリの”ラ・フォツラ”で構わねえか？ 生憎、【イタリアの赤^{ロッシ・イタリアーノ}】は、それしかないんだ」

そして、【ゲスト】二人を入れた、いつもよりほんの少しだけ賑やかな晩餐が始まる。

せっかくなので、俺も飲み物はシスターと同じく”ラ・フォツラ”にして、インディとステイルは、ブリタニア人らしくギネス・ビール、寡黙なスピキオは、いつも通りバーボン、【アーリー・タイムズ】を舐めている。

「あの…なんで、私までご相伴に預かってるんでやしよ？」

と、どうやら売りらしいべらんめえ調でシスターは聞いてくるが、

「客人をもてなすのが、日本の古式ゆかしい風習だ。”郷に入りては郷に従え”って言うだろ？ まあ、口に合わねえと、意味は無いんだけどな」

どうやら、シスターの舌にもあつたらしく、晩餐は盛況だった。

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】

パイロット版（アウレオルス&姫神

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（――）m

そろそろ、【バカ努力の続きまだあ？】の声が怖い暮灘です（^^；
？

「もしかして、【バカ努力】の連載は休止しちゃうのですか？」

まさか（^^；；？

あとがきで小萌ちゃんに会えるのは嬉しいけど、本編をもっと進めない、外伝は厳しいし、そもそも、【最初の事件】は、【バカ努力】本編でやるつもりだしね（^^；；？

「それはつまり、本編で魔術サイドの話が入って事ですか？ それと、小萌”先生”ですからね？」

多分、そうなる（^^；；？

というか、やっぱスルーしないか（笑）

「当然なのですよ」 ところでさっき、『書き終わってから問題があゝ（泣）』とか言っていましたけど、どうかしたのですか？」

うん（汗）

この【あとがき】を読んでる皆様は、本編を読んだ事を前提に話すけど…

問題を二つほど、発見したんだ（^^；；？

「どのような…ですか？」

一つ目は、アウレオルスが【強すぎる】こと（^|^^;）？

原作で披露した【アルス・マグナ】を用いれば、KMF（バカ努力世界では、実在の兵器）の再現なんか楽勝だろうけど、それほどの実力者が、アニエーゼ隊【ごとき】に苦戦するかなって？（^^; ;?）

だって、やろうと思えば、【天草】全員分のKMFを錬金術で用意して、【なんちゃって黒の騎士団（笑）】を作る人だし（ ;^| ^^A？

「な、なるほど…」

もう一つは、B案じゃなくて、後半のシーンの問題だけど…

【美味しい食事と暖かい空気】…アニエーゼが欲しくてたまらない物を、【ただ客人だから】って理由で、仮初めでも一時でも与えてくれた雄二に、本気で【ロータス・ワンド】を向けられるのかなって…

「あゝ、フラグたっちゃってますよねえ…どう見ても」

雄二が厄介なのは、カミジョーさんとフラグの立て方が全く違うとこなんよ（^^ ; ;?）

カミジョーさんは、ヒーローっぽく、【ヒロインの窮地を救う】ってフラグだけど…

「坂本ちゃんは、いつの間にか、心の柔らかくて弱い場所に入り込

みますからねえ…」

雄二は、間違ってもヒーローじゃないから（苦笑）

でも、雄二もアニエーゼも、なんかオルソラよりずっと惹かれ合い
そうであ…

最後は、アニエーゼが信仰で無理矢理想いを押さえつけ、泣きなが
ら戦いそうで…

「切ないのです…」

もう書ける文字数が無いのですが、皆様のご意見感想をお待ちし
ておりますm（――）m

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】シーン・サンプル集2へアニエーゼに

皆様、こんにちはー

いつも心は80%の雨予報（泣）の暮灘です（^^;?）

本日は多忙な為に、【バカ努力】はお休みして、【とある雄二の禁書目録】のシーン・サンプル集を…

という理由は半分で、なぜか【とある雄二の禁書目録】のシーンが、頭に浮かんで離れないのでついつい書いてしまいました。

基本的に、パイロット版B案の続きなんですけど、パイロット版B案の後半、【晚餐】のシーンは、少しの修正でA案、B案の両方に使えるような構造になってるので、今回はあえてどちらかに意識せずに書きました。

作者的には、ゆうくんが無意識に、アニエーゼにえらくゴツツイ先制心理攻撃（笑）をかましたなと（^^;?）

というか、マヂで雄二は才蔵を笑えねえ（汗）

そりゃ、インディも第二や第三がほしくなるかぁって内容です（;

^^;?）

ぶっちゃけ、インディとアニエーゼの愛だけで書き上げたようなサンプル（笑）で、相変わらず【とある魔術の禁書目録】を知らない読者の皆様には、意味不明な内容ですが、楽しんで頂ければ幸いですm（――）m

また、ただのシーン・サンプルなので、あとがきが無いことをご了承くださいませ（――）

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】シーン・サンプル集2へアニメーゼに

バカ努力外伝：【とある雄二の禁書目録】 パイロット版（アウレ
オルス&姫神の場合）
晩餐のシーンの続き

雄二side -

「美味しいッス！ これ、なんて料理なんすか？」

満面の笑みのインディと同等のちっこさと平べったさを誇る赤毛の
シスター、ローマ十字正教の【アニメーゼ・サンクティス】…だっ
たと思うんだが、は、満面の笑みとべらんめえ調の日本語で、舌鼓
を打った。

俺は、つい嬉しくなっちゃう。

（これだから、誰かの為に料理を作るのは、辞められねえな…）

美味しい物を食うと、人間は、つい笑顔になる。
そいつは、万国共通だ。

俺は、そんな笑顔を見るのが好きだった。

「いわゆる【ラフテー料理】って奴だな。沖縄風の豚の角煮さ。豚肉を、醤油と砂糖と泡盛で煮込むのさ」

と言ってもわからんだろうから、

「イタリアにも【豚肉のワイン蒸し】ってあるだろ？ あれの日本版だ」

ちなみに、メインディッシュは、ラフテーだが、スープがわりに同じく圧力鍋で作った【ポトフ（フランスの家庭料理。肉と野菜がたっぷり入ったコンソメ・スープみたいな物）】と、コールスロー・サラダ。

後は【飯の友（笑）】として、自家製の海苔の佃煮とかか？

実は、この海苔の佃煮はインディに好評で、なんでも、ブリタニア本土南部のウェールズ地方では、“シーヴィーズ”というペースト状の海苔（岩海苔）を食べる食文化があるらしい。

（それにしても、面白いシスターさんだな）

「あつしの日本語は、【時代劇】で覚えたもんですから、少々癖があるのは、勘弁してくださいませ」

なるほど、道理でべらんめえ調な訳だぜ。

（だが、食前のお祈りは普通にだったのは、ちと残念だったが）

【天にまします我が父よ。今日も日々の糧を…】みたいな奴だ。どうせなら、べらんめえでやってくれる事を期待したんだが、

そついや、インディはやった事がねえな…

案外、十字教が定める【七つの大罪】の一つ、【暴食】に抵触してるのは、間違いないからか？（苦笑）

ちなみに、同じく七つの大罪の【色欲】に関しちゃ、完全に俺の責任だな（汗）

少なくとも、首輪と手枷と足枷して、服の下は縄で縛られてないと落ち着かない肢体からだにしちまったのは、紛れもなく俺だし…

（昨日は、吊るして尿道カテーテルで遊んだしなあゝ）

いわゆる、強制排尿ってやつか？

痛がつたくせにめちゃくちや濡らしてたから、問題ないだろう。

（いつそ、翔子みたいに、お漏らし癖でも開発してみつか…？）

まあ、アイツがトイレに行けない肢体になったのは、精神的な物が始まりだったらしいが…

（今じゃ、お漏らし癖どころの騒ぎじゃねえけど…）

明久も翔子も、普通に人前でオムツ交換するしな…

（流石にあそこまで突き抜けると、面倒かねえ）

というか、あれだけの大量のオムツ、佐藤はどこに収納してんだ？

俺が、そんなとりとめの無いことを考えてると、

「雄二、どうしたのかな？ 何か考えごと？」

と、俺の隣にいたインディが俺の顔を不思議そうに覗き込むけど、

”ひよい”

「うひゅっ！？」

俺は、座ったままインディのちみっこい身体をひよいと持ち上げ、

”ぼすん”

と、胡座をかいた膝の上に乗つける。

いわゆる、定位置だ。

そして、ちみっこい肢体を後ろから抱き締め、

「インディは、可愛いなあゝとな」

「うみゆ…」

あれだけの調教と羞恥を晒されておきながら、まだ照れを失わないのが、インディの数多い愛しいとこの一つだ。

だから、つい俺もインディにしか聞こえないように…

「だから、今夜はどうやってインディをイジメようかって、考えてたんだよ」

と、囁きながらかりっとトドメに耳を強めに噛む。

「ひゃう!」

”ぶるっ”

フフ…軽くイツちまつたみてえだな？

可愛いやつめ。

「メシ時に発情するなっ!」

おゝお、ステイルの奴、髪どころか顔まで真っ赤にしてご立腹だねゝ。

「メシ食いながら仕事の話するヤンキーよりやあ、マシだろ? そ

「思わないか、シスター？」

俺は呼吸の荒いインディの部屋着のミニスカートの中に、さりげなく手を滑り込ませ、体液をたっぷり吸い込んだ股間に張られた縄を、更にスジに食い込ませながら、シスター・アニエーゼに話を振ってみる。

すると…

「……………」

”しすたーは、かおをまっかにしてかたまっていた（笑）”

おやおや。

シスターとはいえ、情熱において右に出る者無しと吟われたイタリアーノなんだから、もうちょい免疫あるかと思ってたんだがな？

「おい。シスター・アニエーゼ。さっさと戻ってこい」

俺が、何度か呼び掛けると、

「ななな」

ななな？

「なんてことをヤツちまってるんですかいつ！？」

顔を真っ赤にして、バンッとテーブルを叩いて怒鳴るシスターだっ

たが、

「何って…【汝の隣人を愛せよ】って説法にもあるだろ？ それを実践してんだが？」

インディは、住民登録上は、まだ別の部屋に住んでるだから、あながち間違いじゃねえだろ？

「【汝、姦淫する事なかれ】って言葉を知らねえんですかいっ！？」

そう来ましたか（笑）

なんか、ステイルはうんうん頷いてっけど、

「あんな…：その本来の意味は、【売春宿とかに入って、子作り目的じゃない快楽を貪るだけの性交を、不特定多数と楽しむな】って戒めだ。手段はともかく、特定の異性を相手に、しかも避妊無視でやる行為には、当てはまらんぜ？」

俺はニヤリツと笑い、

「そんなもんまで【姦淫】とやらに含んじまったら、神様の言う【生めよ増やせよ地に満ちよ】と矛盾すんだろ？」

「あう…」

ライライ。

見た目どおりの年齢なら、多分、見習い中だろうが…

（本場のシスターが、素人相手に説法で押されてどうするよ？）

少しフォローでもしとくかねえ？

「たしか、”旧約”の【創世記】だったか？ 神は赤き土くれより、己の姿に似せ最初の人間【アダム】を創出し、次いでアダムの肋骨である【エヴァ】を創出した。神はのたもつた『アダムよ、神に従いなさい。エヴァよ、アダムに従いなさい』…だったかな？ インディ？」

俺は、包皮を剥いた肉芽を、爪で軽く引つ搔きながら、聞いてみる。

「きゃうつ！？ だいたい…ひぎいつ！ あって…るんだよ ぎゃん！！！！？」

”ぷしゃっ…じよろじよろじよろ”

ん？

流石に肉芽を捻りながら、尿道を小指でかき回したのは、効いたかな？

インディは大きく身体をゆすると、そのまま金魚みたいに口をぱくぱくさせながら、虚ろな瞳で失禁しながら、果てちまった。

（まあ、何だか面倒ごとの予感がするし…）

ステイルやシスターの持ってきた話によっちゃあ、今夜はお預け食らわせる事になりそうだし…

（インディ、今日はこれで我慢してくれな？）

俺は、心の中で謝った。

「ききき、君はっ!？」

ステイル、お前が何を言いたいのかはわからねえけど、前屈みじゃ何を言ってもサマにならねえと思うぞ？

それはさておき…

「シスター、俺もインディも、それを実践してるだけだ。好きな相手を愛したい、愛されたいと思うのは、当然だろ？ だから、アダムとエヴァから人間は増えた…違うか？」

後にインディは語る。

これこそが、アニエーゼ・サンクティスという【頑迷な信仰者】に雄二がかけた、【シェオールフィア（信仰殺し）】の始まりだったと…

バカ努力セルフSS：【とある西多摩の学園都市】 第0話【俺と命（みこと）】

皆様、こんばんわー

【バカ努力】の作者の暮灘です（^^；？

本日も【バカ努力】はお休みで、ちょっと毛色の違う物を投稿しようかと思いました。

それは、

バカ努力セルフSS：【とある西多摩の学園都市】 第0話【俺と命と賑やかな仲間達…仲間、だよな？】

です（^^；？

タイトルの如く、【バカ努力】でよく名前が出てくる【西多摩】、【西多摩先端研究学園都市】が舞台となるSSなんですよ。

今回の第0話は、【登場人物の紹介】的な話で、時系列的には、【インディが西多摩に現れる前】です。

また、この作品には【とあるシリーズ】原作と比べ、【読みは同じで漢字が違う】、【漢字は同じで読みは違う】、【名前の一部が違

う】キャラが大勢出てきますが、それは【異世界（平行世界）の同位体】であつても、運命…【因果律が大幅に異なる】キャラであることを意味します。

例えば、主人公とヒロインを原作と比較しても…

上条刀摩^{じょうま}

記憶喪失イベント↓抹消

”幻想殺し”以外に”まともな戦闘力”を保有

御坂命^{みこ}

”とうま”にスルーされる↓”とうま”に溺愛される

無期限無制限デレ期^{エターナル・スイーツ}

等々の【運命の変更】があります（^^；？

実は、それは人名に限らず色々と適応されてるのですが（笑）

【とある西多摩の学園都市】は、あくまで【バカ努力】のもう一つのサイドを補完する目的で生まれた物語で、【とあるシリーズ】の

原作と大幅に道筋が異なりますし、その関係で一部のキャラや人間関係も大きく変化してます（^^；？

そのような経緯で生まれた、【変わり種の物語】ですが、もし楽しんで頂ければ幸いですm（——）m

西多摩先端研究学園都市

東京西部にある学生と研究者：様々な科学者、錬金術師、魔導師（魔法使い）が集まり、常に【科学、魔法、錬金を有機的に融合させ、その複合先端分野を日本の産業に反映させ、祖国を繁栄させる】事を目的とした街である。

そのような場所柄だからこそ、【魔法と科学と錬金術の先端研究者を集まってるのだ。

なら、折角だから新ジャンルの《超能力》の研究でもしてみようじゃないか？】と、超能力の研究が始められたのは、別段、不思議な事ではない。

その運営に出資してるのは公的機関なら、科学技術省を筆頭に、厚生省や文部省、通産省に国防省等々幾多の関係省庁に、宇宙開発公団などの公団や公社も名を連ねている。

つまり、何が言いたいかと言うと、西多摩先端研究学園都市、通称【西多摩】は、地外法権などではなく、ちゃんと日本の領土であり、場所柄の特例や例外はあっても、日本の法律の適応範囲って事だ。

間違つても……

「ロシアと単独戦争だアアアーーーーッ！　ヒャッハアアアーーーーッ
 ！！」

ってノリは、有り得ない。

そういう意味じゃあどこその平行世界（笑）の【学園都市】よりは、遥かに安全性は高い。

精々居るのは…

「日本のオオオーーーーッ！ 科学力はアアアーーーーッ！！ 世界一
イイイーーーーッ！！！」

って科学者がいたり、

「実験実験実験実験ッ！！ この世界の謎を解きつ！！ 神が残したもうた暗号を解読し、真理を探求する事が我々の使命なのですっ！！」

なんて錬金術師がいたり、

「魔法を^{みた}妄りに使ってはいけませーん。魔法の実験材料にしているのは、化物と異教徒だけデース…エイメン!!」

つて、魔導師がいたりと……

•
•
•
•
•
•

あんな、安全性高くないかも（笑）

特に最後の奴、ローマ系の十字教徒だろ、絶対つ！？

まあ、そんな危険人物達は、放っておいて、

（幸せだ…）

と、わたくし【かみじょう・とうま上条刀摩】は、つくづく幸せを噛み締めてる訳です。

子供の頃の夢は、色褪せない落書きなんて歌があっただけでさ、子供の頃の夢って、本当にとりとめないよな？

やれ、パイロットになりたいとか、宇宙飛行士になりたいとかさ？

俺の【しんゆう腐れ縁】なんざ、【正義の味方】って書いてたしな。

（そう考えれば、俺は夢の無いガキだったなあ…）

なんせ、小学校時代の作文に…

【しあわせになりたい】

って書いたっけ…（泣）

どういう訳か、ガキの頃から俺は、運が無かったんだよ。

いつも有り得ない事ばかりに、巻き込まれてさ…

んで、俺の【不幸体質】に巻き込まれたくないって、友達も作りづらくて…

（でも、【アイツ】だけは、違ったよな…）

ああつ、さっき言ってた【腐れ縁】^{しんぐら}の事さ。

アイツも何だかガキの頃に、【向きを操作する力】だか何だかって、とんでもない【能力】^{ちから}持ってたせいで孤立しがちで、

（でも、俺にはどういう訳か、力が通用しなかったからなあ…）

でもさ、アイツとの出会い自体は悪くはないけどさ、少なくとも最初だけは、立派に不幸だったと思うぜ？

だってさあ…

（何が哀しくて、小学生同士が、ガチの殺し合いをやらねばならな

いのでせうかつ!?)

まあ、それでも何とか【ともだち】って奴になって、アイツの暴走を俺が打ち消し、時折、拳でツッコミ入れたりしてるうちに【腐れ縁^{しんゆう}】になったりと、中々有意義ではあったんだけど、【不幸】ってのは、中々消えてくれないもんでして…

(クライマックスは、中三の時だったなあ…)

いや、流石の上条さんも、

(非合法工作専門の非公開政府機関の【濡れ仕事】の現場を目撃するとは、思いませんでしたよっ!)

ちなみに【濡れ仕事】ってのは、【えっちな仕事】って意味じゃなくて、【血生臭い仕事】って意味で、ぶっちゃけ暗殺とかなんよ。

俺が目撃したのも、そんな現場。

(相手が魔術師や錬金術師とかなら何とかなっただかもしれないけど…【ちよっとした切札】ならあったしな)

本格的な高度戦闘訓練を受けて、尚且つ実戦経験豊富な、オマケに物理兵器で武装した一個分隊(9人編成)には、手も足も出ませんでした(泣)

でも、本来なら【現場処分】されてもおかしくないシチュエーションだったんだけど、俺をすっかり現場に入れてしまった負い目があったのか、連中の親玉…【全身黒づくめで、顔の上半分を尖ったバイザーで隠し、マントを羽織った、俺と同じ黒髪のツンツン頭のテレポーター(?)】の隊長に、こう言われたんでせうよ。

『喜べ。君には、選択肢がある。一つは記憶消去。もう一つは、俺達の【身内】になるかだ』

上条さんが選んだのは、後者だった。

その【ガツチャマンもどき】の現場隊長に言わせれば、【現場目撃の情報だけ】を消去する事は、可能だったらしいんだけど…

(なんか、嫌な予感がしたんだよなあ…)

上手くは言えないんだけど、処理に失敗して【脳味噌に直接、スタンガンを押し付けて、脳細胞を殺した】ような状態で、記憶が全部パーになるような…そんな、有り得ない状態が、待ってるような気がする…

まあ、そんな事情で、俺は【政府の暗部や裏側と関わりのある人間】

と悟られないまま、とりあえず使える戦闘力を、【説得力のある方法】で手に入れる為に、受験先を急遽変更したのさ。

具体的には、東京のベイサイド・エリアにある”武装偵護官”を養成する【武偵高校】を受験したんでせうよ。

ちなみに所属していたのは、かの悪名高き【強襲科】アサルト…

（あの三年間、流石に何度死にかけた事か…）

思い出すだけ馬鹿馬鹿しい数だったような気が…（汗）

そして、卒業してから極秘裏に【任官】して、最初の赴任地が…

（この【西多摩先端研究学園都市】だった…）

【西多摩】に来てからも色々あったんだけどさ…
とりあえずの驚きは、

（まさか、高校一年生からやり直しとは、思わなかったですたい！）

身分や年齢の詐称は、潜入工作の基本なれど、【普段は、普通の高校生として過ごし、裏からの西多摩の治安任務にあたれ】と言われるとは、思わなかったぜ。

でも、それはそれで、悪くない…いや、むしろラッキーだったと思う今日この頃。

何故って…

（幸せだあ…）

冒頭に戻ってしまうんでせうが…

視界の端に見えるのは、綺麗に折り畳まれた【常盤台】の制服と、その上にちょこんと鎮座する、スッゴい控え目なサイズのブラと、二人分の体液の混合液で、洗濯以外の選択肢がないビチヨビチヨなぱんつ…

視線を、台所に移すと…

「ふんふんふんふん♪」

鼻歌混じりに、小振りな生尻が、揺れていた！

人には、色々な夢がある…

だけど、健全な青少年の夢の一つは間違いなく、

（可愛い彼女の【裸エプロン】では、ないでせうかっ！…！）

俺は、おもむろに立ち上がる…

いや、だって脚の付け根から溢れ出て、太股の内側を伝ってツウと零れ落ちて、ルーソまで濡らしてる…なんて姿を見てたら、いくら上条さんでも、辛抱たまらんです！

いや、その原因を作った…一緒に買い物した帰り際、あまりの愛らしさに我慢できず、途中の公園で着衣のままぱんっただけずらして一戦やらかし、散々中で放しまくったのは、他でもない上条さんなんです（汗）

俺は、その料理に勤しむ少女の後ろに立つと、

「ひゃん！」

エプロンの中に両手を滑り込ませて、メチャクチャ好みの手の平にすっぽり収まるスモールな膨らみを揉みながら、先端をいじったりなんかしちやったりして、甘い声を上げさせるのであった。

「とうまあ…今、包丁使ってるから危ないよお…」

もう感じ始めてるのか、顔を真っ赤にしながら、どことなく声を上擦らせる彼女に、

「みこと」が可愛い過ぎるのが、悪いんだ」

と、耳たぶを噛みながら囁いた。

彼女の名前は、【御坂命】みさか・みこと…ああつ、命と書いても、触角みたいな髪型でファイナル・フュージョンを承認したりしないぞ？

髪型は、歳相応のショート的茶髪、名門お嬢様学校の【常盤台】の学生で、学園都市でも片手の指の数程しかない【レベル5】の能力者…いわゆる【超能力者】だ。

とはいえ、上条さんにとっては、常に愛らしい【女の子】の”みこと”でしかないんですが（笑）

出会いは特筆すべきようなもんはなかったんだけど、やっぱり付き合う切っ掛けになったのは…

（みことの【シスターズ】事件だったよな）

【シスターズ事件】って言うのは、簡単に言えば、

幼い頃の命を騙して抜き取った遺伝子地図を元に培養したクローン
シスターズ
体を、戦闘触媒……イケニエ”にして【レベル5能力者】を、【レベル6】に人工進化させちゃおう。キラッ

なんてフザケタ計画だったんだが、勿論、そんなグレイゾーンどころかダークゾーンと真ん中の計画が上手くいく筈もなく、【1stロットの200人】の製造途中（幼体状態）にあえなく当局に察知され、俺や命、繋がりを持った垣根なんかの他の能力者や、ジャック・ジメント等々の総攻撃を食らい、【西多摩始まって以来の大粛正】が行われ、計画は物理的にも壊滅……って、顛末だったんだ。

（吊り橋効果って奴かな……？）

多分、そんな心理も関係してると思うんだけど、それは別段どうでもいい。

みことは、元々俺のストライク・ゾーンだったし……

（それに、あの事件以来、性格も甘久になったし……）

何故だかよくチームを組む事が多い悪友にして級友、【ネセサリウ

ス（必要悪の教会）】所属の陰陽師で、妹と熱愛中であつくの昔に一線越えてるといふ、よくわからん立ち位置にいる土御門つちみかどによれば、

『デレ期の《いいなりモード》に突入したんだにゃー』

であるらしい。

（とゆーか、やっぱりよく分からん）

世の中、上条さんが知らない言葉も多いと確認した所で、

「みこと…包丁を置いて手について、そのまま足を開くんだ」

みことは、正気が押し潰されたトロンと蕩けた瞳で、

「うん、とうまあ…」みこと”はね、とうまの言うこと、何でもきくよ？ だから、みことで、いっぱい遊んでえ…」

さてさて、みこととみことお手製の昼飯を食べ終えて、胡座をかいた膝の上に乗っける感じでみことを連結（笑）しながらイチャイチャしてると…

” R R R … R R R … ”

と、無粋に鳴る携帯の着信。

いっそ、切ってやろうかとも思ったが、発信者を見て思い止まる。

俺は、電話をとると、

「どったんだよ”カザリン”？ 今、みことと良いところなんだけど？」

すると、電話主は、

『誰が”カザリン”ですかっ！ わたしは”飾利”です！ ”初春^{ういはる}飾利”！ いい加減に覚えてくださいよっ！』

あゝ、はいはい。

「わかったわかった、【平沢唯】」

『誰ですかっ！？ そんな事を言ったら、佐天さんは【エルシー】じゃないですかっ！』

実はお前、ネタわかってるだろ？

「んで、どうしたんだよ？ 【イカ娘】でも侵略してきたか？」

『そんな可愛げのある物だったら、誰かに報せる前にゲットしてお持ち帰りします！』

なんか、妙な覚悟を言った後、電話がどうやらマイク音声に切り替わり、

『おつらアッ！ さつさと出てこねエと、建物ごとミンチにしちまウゼエー！』

『ミサカは、それが一番効率的だと”お兄ちゃん”に進言します』

『ミサカは、既に包囲殲滅の準備が出来たと”お兄様”に報告します』

『”局長”！ 駄目ツスよ！ 生け捕りが、基本ですって！』

何となく、状況を把握。

（なるほどね…）

アイツが…

【西多摩】で再会したら、”ジャッジメント（秩序を守る抑止力）”になってた【腐れ縁】^{しんめう}が、今日も元気に暴れてるって訳ね（笑）

「んで、俺に【一方通行】^{ひかりいひ}を止めると？」

『出来れば、殺りすぎようとした時、ツッコミを入れて貰えれば』
やれやれだぜ。

本当に、

「退屈しないぜ…！！」

皆様、ご愛読ありがとうございましたm（――）m

ようやく前々から構想してた【西多摩】の話を具象化でき、ホツとしてる暮灘です（^^；；？

「ミサカはミサカは、【姉妹達】が出てきて大歓喜なのです♪ キヤッホーなのです」

あゝ、この話でようやくちみつ娘の正体がわかったわ。

お前さん、救出された【200人のミサカ幼体】の一人だったのか（^^；；？

「エッヘン！ その通りなのです♪ ミサカ達が救出されたのは、ちょうど原作【打ち止め（ラスト・オーダー）】と同じサイズに成長した頃だったので、【バカ努力】世界には、200人の【ちびミサカ】が存在するのです♪」

にやるほど…

って、まさか最後に一方通行と一緒に出てきたのって…

「正解なのです♪ 台詞があつたのは、一方通行さんのお世話になつてる【12人の姉妹】^{トウエレフ・シスターズ}だったりして 一方さんは、報酬として最初200人全員の保護を要求したんですが…」

何を考えてるんだ、アヤツは（^^―^^；；）？

「流石に回りに反対されて12人に落ち着いたんです。それで、せっかく12人なので…」

その先は言わなくて良いぞ？（^^；？

12人、シスターってキーワードで大体、一方通行の目指す方向性が分かったから（汗）

「あの【プレステ時代末期の名作ギャルゲー】は、今でも一方さんのバイブルだと、ミサカはミサカは密告したりするのです」

なんか、【あとがき特典（笑）】として、とんでもないネタが出ましたが、皆様、楽しんで戴けたでしょうか？（^^；？

【えくすとら！】は、あまり読者様が読まれない作品だと思いますが、もし評判が良いようなら、たまにこんな【西多摩^{とま}】サイドの話を書いてみたいなあ〜と思ってます（^^；？

特に【シスターズ事件】とか面白そうですし（笑）

もしよろしければ、ご意見感想などを頂ければ、幸いです（――）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0463t/>

バカと努力っ娘と四角形 えくすとら!

2011年6月19日16時05分発行